師匠とＡＶ

霊〇〇隆、カレシとの初めて、全部みせちゃいます！　後編

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18772021

R-18, モ腐サイコ100, 芹霊, ♡喘ぎ

師匠が出演してるＡＶを見つけてしまった芹沢の芹霊すったもんだです。撮影後編です。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

霊〇〇隆、カレシとの初めて、全部みせちゃいます！　後編

カメラの前で舌を絡め合わせながら、霊幻さんのネクタイをしゅるりと外す。
「！」
霊幻さんの目が驚愕に見開かれ、不安そうに俺を見つめてくる。その表情に一台のカメラからズームの音がしてきていた。
スーツのボタンを外し、震える手でもたもたとシャツのボタンを外す。
ぐいっと霊幻さんが俺の襟を引いて、
「優しくしてくれよ」
耳元で囁いてきて、フリーズしそうになった。
カメラだけじゃなくマイクもぐわっと寄ってくる。なんだか大きな甲殻類の足元でイチャついている気分だ。
またキスをしながら、ボタンの残り半分を外す。
そ、っとシャツをくつろげて。
淡い色の乳首が出てきて、何故か頭に『大勝利』の文字が浮かんできてしまった。
「……あんまじろじろ見んなよ、恥ずかしい」
「綺麗です」
思わず言ってしまって、はっとカンペを見る。『続行』と書かれていたので、

つん、と、

乳首を人差し指でつついたら、霊幻さんが信じられない、という顔でこちらを見た。

だって。

つつきたくなるでしょう、コレは。

「……っ」
つんつんとつついていると、だんだん先端が硬くなって乳輪も縮まっていく。
わ、乳首の勃起ってエロいな……と思っていたら、手元にカメラが集まってきて、だよね、と思った。
カメラをじゃましないよう、ペタ、と脇腹を手のひらで触って。
「絹みたいだ……」
触り心地に驚いて思わず声が漏れた。カンペ確認、『続行』。
「くすぐったい」
そのまますりすりベタベタ触っていたら、くふくふ笑う霊幻さんの声が落ちてきて。
頬を染めながら優しく笑う霊幻さんは美しくて。３台のカメラが慌ただしくその顔を撮っていた。
「あの……舐めてもいいですか」
「……いいよ」
ベロリ、とワキバラに舌を這わせて、唇で身体のラインを辿る。
「あ」
予想外の行動だったらしい。霊幻さんから思ったよりも甘やかな声が漏れた。
「いただきます」
興奮して、変なことを発情したような声で言ってしまった。
唇で触れる霊幻さんの肌が上質な肉のようにしっとりと吸い付く。
『あとは付けないで』のカンペを確認。ぐわっと開けた口を、一旦閉じる。俺も初めてだ。力加減できるか分からなかった。
「……っ」
乳首に唇で触れると、霊幻さんが息をのんだ。
ベロリと舐めて、舌先ではじく。
「あ、あぅ」
霊幻さんから困惑した声が上がる。
「……っ！」
ちゅる、と乳首を吸い上げると、くしゃ、と霊幻さんが俺の髪を乱した。

『カット』
そのカンペを見て、霊幻さんの乳首を咥えたまま固まる。
「はいカットー！中々いい捕食映像撮れました！いいよいいよ、エロいよー！！」
現場を盛り上げるプロデューサーの声に俺も霊幻さんも赤面する。
「次は霊幻ちゃん彼氏さんにフェラして、顔射されてねー。彼氏さん出る時は合図してね」
「フェラって、どうしたら」
「カンペ出すから、目を伏せるフリして確認して」
「分かりました」
「じゃあ芹沢ちゃん、下着付けてきて。それから勃ち待ち入るから」
「はい」
控え室に戻って、置いてあるボクサーパンツを履く。
フェラ……霊幻さんにフェラしてもらえる……
夢みたいだ……
スーツを着てスタジオに戻る。
「じゃ、霊幻ちゃん、膝立ちになって芹沢ちゃんのズボン口で脱がしてみて」
「はい」
霊幻さんはかちゃかちゃと難なくベルトを外して、ジッパーを口で下ろした。
「……上手いね。練習いらなかったな、こりゃ」
霊幻さん、器用だからなぁ……。
「監督、男優さん勃ち待ちいらないです」
俺の股間を覗き込んでスタッフが叫ぶ。
「ほんっと霊幻ちゃん好きだね、芹沢ちゃん……コッチがＯＫ出すまでイかないでね」
ほぼ完勃ちの俺に、霊幻さんが赤面する。
いやだって。
期待するでしょ、フェラ。
「じゃ、キスから再開ね。チェック、チェック、スタンバーイ」
霊幻さんの唇に舌で触れる。さわさわとドサクサに紛れて胸を手で

まさぐるとピクンと霊幻さんが反応した後、ちょっと睨まれた。
カチンコが鳴らされて、霊幻さんはさりげなく身体をまさぐる俺の手を外して膝立ちになる。
霊幻さんの頭が股間にある、という非日常がヤバすぎて。
俺はふわふわ揺れる霊幻さんの髪を、これまでに無いほど性的な目で見て興奮していた。
「……おちんちん見たい」
！？！？！？！？
上目遣いでそう言われてパニックを起こしそうになるが、おそらく俺から見えない位置のカンペを霊幻さんは見ている。
俺のカンペには『おねだりしてとアドリブで』と書かれていた。
「もっとちゃんとおねだりしてください」
戸惑った霊幻さんが潤んだ瞳で見上げてくるていうか俺のお粗末で良ければいくらでも見てもらっていいんですけどね！？！？
「ダーリンの、えっちなところ、新隆に見せて……？」
破　壊　力　の　化　け　物！！
「……っ、い゛い゛よ゛」
めちゃくちゃ変な声出た。
現場は俺を無視して、霊幻さんは俺のベルトを外して口でジッパーを下ろしている。
俺の性器はボクサーパンツを思いっきり押し上げていて、テントを張っていた。
「おっきい……♡」
うっとりして言う霊幻さん。
暴発しそう。
思いっきり顔に出てるのか、カンペにデカデカと『イかない！！』と書かれている。
「わっ」
霊幻さんがボクサーパンツをずらすと、ボロン、って擬音がぴったりすぎる勢いで愚息が飛び出す。
「気持ち良くしてあげるね……♡」
がわ゛い゛い゛っ゛！
つつ、と俺の性器を指で撫でて微笑う霊幻さんがヤバい。もう何も

かもヤバい。
『イかない！！』とカンペがもう一枚出された。
「ん……」
霊幻さんがペロペロと先端を舌を伸ばして舐める。カウパーが止まらない。
くちゅ……ぴちゃ……
舌のひらで幹を舐めはじめた霊幻さんにマイクが寄る。
こういう時空いてる部分を手コキしたりするのをＡＶでは見るけど、たぶん俺が暴発しそうだから手コキしないように指示が飛んでる。
「うっ」
ぱく、と霊幻さんが先端を咥えて、その暖かさに出そうになる。
俺！！童貞なんですよ！！
そのままちゅぱちゅぱ棒キャンディーみたいに舐める霊幻さんに、もはや俺は泣きそうになってきた。
イきたい……。
「んぐ」
ずぶずぶと幹を飲み込んでいく霊幻さんの後頭部を思わず掴む。
出ます。ムリ。
『もうちょっと！！』
カンペが一枚増えた。
くっちゅくっちゅと頭を前後させる霊幻さんに腰がガクガク震えてくる。
かは、と苦しそうに霊幻さんが口を離した。
『出して！！』
びゅるる、と勢いよく霊幻さんにぶっかけてしまう。オナ禁してたせいもあって、めちゃくちゃ出た。
俺の精液で髪もスーツも片目もベタベタになった霊幻さんに生唾を飲む。
「いっぱい出たな……♡」
ペロリ、と唇に垂れてきた精液を霊幻さんが舌で舐めてどきりとする。
『カット５秒前』

俺と霊幻さんは静止して、ボタボタと精液が垂れるのをそのままにしていた。
「はいカットー！フェラぶっかけオッケーでーす！！」
カチンコが鳴らされて、ほっと力が抜けた。
「大丈夫ですか、霊幻さん」
俺が手を出そうとする前に、ティッシュを持ってスタッフが数人霊幻さんに群がる。
「霊幻さん、シャワー浴びるまで目を開けないで！感染症になりますから！！スーツクリーニング！女優さんシャワー入りまーす！！」
テキパキと霊幻さんのスーツは脱がされて処理され、霊幻さん本人は控え室のシャワー室に連れて行かれている。
「酵素入りシャンプーが置いてあるんで、髪はソレで綺麗にしてください。コンディショナーしてくださいね。ブローはスタッフでやるので、シャワーを浴びたらスタジオに来てください」
「はい」
バタバタする現場に手持ち無沙汰に立ち尽くしてしまう。
「芹沢ちゃんは下着脱いで控え室でスタンバイね。水分補給とかトイレとか済ましておいて」
「あ、はい」
プロデューサーさんに言われて、トイレに行ってから控え室で下着を脱いで、お菓子と水を貰う。
シャワーブースで霊幻さんが身体を洗ってるのが見えて。
気になって仕方無かった。
オナ禁してきてるせいか、霊幻さんの何を見てもエロい。何もかもがエロい。水滴すらエロく感じる。
ガラガラと折り畳み戸を開けて出てきた霊幻さんの裸体を、穴が開きそうなほど見つめてしまう。
「……なんだよ」
タオルで身体を拭きながらじとりと霊幻さんが俺を睨む。
照れ隠しか、頬が赤い。
「見てちゃダメですか」
「ダメ。あっち向いてろ」

残念。俺はくるりと背中を向けた。
ごそごそと霊幻さんが撮影用のスーツを着る音がする。
シャツガーターを留める音がして。
「あ、霊幻ちゃん、次手マン撮るから、下着履いてね」
「はい」
プロデューサーさんが控え室に顔を出す。
霊幻さんは髪の毛をセットしてもらいにスタジオに戻る。
ほどなくして、俺もスタッフさんに呼ばれて、下着を履いてスタジオに戻った。
「チェック！チェック！スタンバイ！！彼氏さんズボンくつろげてちんこ出して！霊幻先生髪の毛をティッシュで拭くところから！撮影再開します！！スタンバーイ！！」
慌ただしく配置につく。
俺も慌ててズボンがらちんこをボロンさせた。
「スタート！」
カチンコが鳴る。
「気持ち良かった……？」
膝立ちになった霊幻さんがティッシュを箱から取って、髪を拭くフリをしながら訊いてくる。
答えそうになって、『黙る』のカンペを見てこくこくと頷くだけにする。
『ベッドに連れて行って押し倒す、ズボンと下着を脱がせる』
緊張で冷や汗が出る。
「わっ」
俺は危なくないよう超能力で補助しながら霊幻さんをお姫様抱っこして、ベッドに連れて行って横たえる。
「カット」
冷たいプロデューサーさんの声が響いて、現場が凍りついた。
「芹沢さん、なんで霊幻さん抱き上げたりしたの？」
これまでになく真剣なプロデューサーさんの声が響いて、固まる。
「すすす、すいません」
「万が一落としたりしてたら、どう責任取るの？半身不随になる人だっているんだよ？」

はぁ、とプロデューサーさんがため息をつく。
「ＡＶで駅弁撮る時だってね、事故が起こらないようにスタッフがすぐ近くで何人も待機して撮るのよ。分かったら２度と抱き上げたりしないで」
「……すいませんでした」
しゅん、としてしまう。
「……彼氏さん力持ちで頼りがいあるじゃん！はいはい説教終わり！！これから霊幻ちゃんのエロいところだから、ヨダレふいてよ！！」
プロデューサーさんがいつもの明るい声に戻ってホッとする。
「はい、霊幻ちゃんに覆いかぶさりかかるところでストップしてー。スタンバイ、再開！」
震える手で霊幻さんのズボンのベルトを外す。しゅる、とベルトを抜いて、床に落とす。
プレゼントの包み紙を欲望のままに剥いている気分だ。ズボンの金具を外し、チャックを下ろして、ズボンを抜き取った。
喉を鳴らしながら下着をゆっくり下ろす。
「舐めて興奮したんですか……？」
半勃ちの霊幻さんの性器にめまいがする。
「……っお前の、おっきかったから……期待した」
するすると下着を脱がせながら、貧血を起こしそうだ。
「あっ」
可愛い霊幻さんの淡い性器を手を筒にして刺激する。
「やっ……んんっ、」
すぐに完勃ちになった。
霊幻さんのカウパーがたらたらと垂れてくるアナルをカメラがアップで映る。
「俺の……処女アナルです」
血液が沸騰させそうなことを言いながら、霊幻さんがぐいっと広げる。
綺麗なピンク色のアナルをカメラがじっくりと撮る。
カンペでＧＯが出たので、俺は中指にスタッフさんから渡されたローションを絡めて、

霊幻さんの中に入れた。

「〰〰〰っ、」
違和感に霊幻さんが身を固くする。
「熱いし、絡みついてきて……これ、絶対挿れたら気持ちいい」
ゆっくり指を動かしながら思わず素直な感想がこぼれる。
「〰〰〰っ、ばかぁ……っ」
上ずった声で言われても、興奮するだけだ。
ずっと勃ちっぱなしでカウパーダラダラこぼしてる自分の愚息が恥ずかしい。早く挿れたい。
「んぁっ！」
ぐ、と手に力が入ってしまって慌てて緩める。今は手マンに集中しないと……。
スタッフさんからまたローションを受け取り、人差し指にも絡めてナカに埋めていく。
「は、うっ、ゆび、太い……っ」
はぁはぁと霊幻さんの呼吸が指の違和感で上がっていく。
汗が浮かんできた霊幻さんの上半身をカメラの１台が追っている。
俺の手元にカメラが寄ってくると共に、またローションが渡された。
「……！？！？！？」
指を３本挿れて抜き挿ししていると、霊幻さんが突然ぎくりと身体をこわばらせた。
「あ、あ……そこ、そこ……っ」
霊幻さんがはひはひ言い出したので、トン、と中指でナカを押し込んだら、
「いやだぁ……っ」
甘い声で鳴いて、霊幻さんが射精した。
カメラとマイクが慌ただしく動き回る。
「も、トントン、やめろ……っあ、また、クる……っ！」
霊幻さんが枕を掴んで身体を逸らす。
パサパサと綺麗な髪がシーツを叩く。

「やだぁ……っ、も、触るなぁ……っ」
俺を蹴り飛ばそうとした力無い足をぱしっと掴んで、ぐりっと指をねじ込んだ。
「ああああああーっ！！」
エビゾリになってダラダラと精液を垂らしながら、悩ましく細められた目からぽろぽろと快楽の涙をこぼす壮絶な絶頂に、スタジオが走り回りながら映像を撮ってまわる。
……思わず霊幻さんをいじめてしまった。打てば響くような身体がたまらなかった。
「はっ……はぁ、はぁ……」
ぐいと涙を拭いた霊幻さんが息を整えてこちらを恨めしそうに見る。
「……おれ、やだって言った」
かかかかか可愛い！！！！
えっ狙ってやってます？素でしょ、それ？可愛いで賞をあげます。今度メダル作ってあげますね。
「はいカットー！！」
カチンコが鳴って正気に戻る。
「すごく良かったよー！！じゃあまず中出し撮るから、擬似精子注入しまーす。処女っぽく赤色混ぜて〜」
スタッフさんがローションみたいな白いドロドロを混ぜている。そこに少しだけ食用色素の赤を入れていた。
「処女膜イメージだね。おやくそくってやつ」
出来た擬似精液を挿入用の先端の太くて丸い注射器に吸い取って、スタッフさんが混ぜながらカイロで暖めている。
「霊幻さん、トイレ大丈夫ですか？仕込み精液入れますけど、大丈夫ですか」
「はい、大丈夫です……」
まだぽーっとしている霊幻さんの後口に、スタッフさんが注射器を挿入していく。
「奥に出します。なるべく押し出さないで」
「……っ、はいっ」
異物が注入される感覚に身震いする霊幻さんが色っぽい。

「このシーンも撮りたいぐらいだなー」
このプロデューサーさんとは趣味が合うと思った。
「霊幻ちゃんさあ、すごい色っぽいんだよね。俺ね、カメラ回してびっくりしたわ。芹沢ちゃんもびっくりしたんじゃない？」
「あ……俺、前のＡＶ見て、霊幻さんがエロいの知ってるんで……」
「あれ見てくれたの！？良く撮れてるでしょ〜。評判良くてね、アレ。ウチはゲイビデオ専門じゃないんだけど、撮りたかったんだよね、続編。それにしても芹沢ちゃんは憧れのＡＶ女優と付き合えてラッキーだね」
「あ、俺、元々霊幻さんが好きで。後から見つけたんですよ、ＡＶ」
「……ふ〜ん」
ニヤリ、と悪い大人の顔をしてプロデューサーさんが俺の目を覗き込む。
「脅した？霊幻ちゃんのこと」
「！そ、れは」
うろたえてしまう。
「ま、どうでもいいけどね。次中出し撮るから、しばらくは尿道炎に気を付けてね〜。……気を付けようがないんだけどさ」
ぽん、と俺の肩を叩くプロデューサーさん。
「どんな手を使ってでも手に入れたいオンナってのは、絶対に手放しちゃいけない宝モンだと思うぜ。応援してるよ、卑怯モン」
言い返そうとして、言葉が出ない。くやしい。人生の経験値が違いすぎる。
「はーい、処女喪失撮ります！１カメ最初から表情撮って！２カメクレーンで彼氏くんの肩越しから結合部！！３カメは横から全体！！」
あ。
現場の緊張感が凄すぎて。
ヤバい、萎えてきた。
「す、すみません……」
「……あー、勃ち待ち入りまーす。すぐ再開できるようにスタッフ

そのままね」
情けない。これから霊幻さんを抱ける、って言うのに。
「せりざわ、こっち来い」
まだ頬がほんのり赤い霊幻さんが、俺に声をかける。
「おれと、なにしたい？」
ひそ、と耳打ちされて、胸が跳ねる。
「……セックス、したいです」
「うん」
「それに、いっぱい、キスしたい」
「うん」
「イかせるのも、ハマりました。もっとイかせたい」
ぶるりと霊幻さんが劣情に震える。
「うん……♡」
「あと、デートに行って、ご飯も一緒に食べて、旅行とかも行って、」
「そんで、ヤるの……？」
はむ、と霊幻さんの唇が俺の耳たぶを咥える。
「は、はい……っ」
「おれも」
ぴちゃ、と霊幻さんの舌が、耳たぶを這う。
「おれも、せりざわと、ヤりたいよ……♡」
「……っ、霊幻さんっ！」
たまらなくなって霊幻さんを押し倒す。
「はい男優さん勃起しましたー！！」
「撮影再開！！」
……一瞬ここが何処か完全に忘れていた。
ともかく、盛り上がった気分のまま、カメラを意識に入れないようにしながら先端を霊幻さんのアナルに触れさせる。
「い、いれます」
ぐぷ、と先端が一気にめり込む。
──やった。
これで、この人は、俺のものだ。
「あ……う……ゆっくりぃ……っ」

痛みに顔を歪める霊幻さんの目元から、つうっと涙が一筋流れて、ドキっとするほど綺麗だった。
「霊幻さん……俺、あなたのこと、大事にします」
──そんなことを言いながら。
俺の中を満たしているのは、支配欲だった。この人の処女を奪ったことで、魂に手を掛けた。そんな仄暗い、勝利の味。
「ぅんっ……」
辛そうな霊幻さんを見ながら、腰を進める。
「……信じてるよ」
どきっ、と後ろめたさに胸が跳ねた。
霊幻さん。
霊幻さん、俺、貴方には誠実でいてたんです。
たった一度。
あなたを手に入れる時以外は。
俺は誠実な男だったんです。
あれは、脅しでした。
それでも欲しかった。自分の矜持と秤にかけて、あなたを選んだ。
俺の愚かさを、俺はどうしたらいいんだろう。
こんなことは、初めてで。
俺は俺で、人をおとしいれる処女をあなたに捧げたんです、霊幻さん。
「はっ……は、はぁっ……」
最後まではいった。たぶん俺は、一生の内でしたことないような、悪い顔をしてニヤニヤしていると思う。
突然。
死にたくなるような罪悪感が俺を襲って、吐きそうになった。
「っんあ♡」
霊幻さんが喘ぎ声を上げて。
トロリとした目と目が合って。
その瞬間、身体の何処に隠れていたのが分からないほどの愛しさが、全身を満たしてジンジンさせた。
そうだ。
吐き気がするような支配欲の、元は、これだったんだ。

「霊幻さん、好き、好きです。愛してる。誰にも渡したくない」
「あっ♡あ♡あんっ♡」
ズンズンと腰を打ち付けてしまう。足りない。もっと奥へ。
「霊幻さん……っ」
「あぁ……っ！」
一旦ギリギリまで抜いた怒張を、ズブンと奥まで打ち込む。
「イく……っ♡」
霊幻さんが悩ましく目を伏せて、長いまつ毛をキラキラさせながら唇を噛む。
びゅるる、と霊幻さんが快楽の証をこぼす。
「霊幻さんっ、俺もっ、もうっ」
ゾクゾクと予兆が背筋を這い上がってくる。
種付け。
そんな言葉がよぎったら、もうダメだった。
「……っう」
ごりごりと恥骨を霊幻さんに押し付けながら、長い射精をした。
「はぁっ、はぁ……」
……性器を抜いても、精液が出てこない。
カンペの指示通り、中指を突っ込んでほじるようにすると、ごぷりと精液が出てきて、シーツまで垂れた。
「処女卒業アンド初中出しおめでと〜霊幻センセ。ご感想は？」
プロデューサーさんのナレーションだ。久しぶりだな。
「好きな人に奪ってもらえて、幸せだ♡」
ピースしながら言う霊幻さんに、カンペを読んでるだけだと分かっていても。
分かっていてもっっっっ！！！！
「彼氏さん感動して泣いちゃってんじゃん（笑）じゃあもっとセックス見せてくれる？」
「……分かった」
恥じらいながら頷く霊幻さんをしばし映して、カットが入る。
「じゃあ間髪おかずに、浮橋と騎乗位撮りまーす。サポートに男優さんスタンバイよろしく」
スーツの男性が 2 人スタジオに入ってくる。

「じゃ芹沢ちゃん、霊幻ちゃんを後ろから寝たまま抱きしめて？そう。そのまま左足持ち上げて、そのまま挿入できる？出来そう？
じゃあカメラ回しまーす」
カチンコが鳴る。
「んあっ！」
ずぶ、と挿入すると、霊幻さんが甲高い声を上げる。
「やだっ、もうっ、まだ、やるのぉ……っ？」
『足りない』
「足りないです、霊幻さん」
カンペをアレンジして読む。
「やぁんっ、イく、イクってばぁ……っ！」
ずこずこしてるとビクビク震えてイく霊幻さん。俺も締め付けに逆らわず中出しする。ぷし、とアナルから精液が噴き出すのをカメラが真剣に撮っている。
それを恥ずかしそうに霊幻さんが戸惑った目で追っている。
カット。
足がガクガクする霊幻さんを男優さんがサポートしながら、寝転がった俺の上に膝立ちにさせられる霊幻さん。
片手を恋人繋ぎにして感動する。
再開。
霊幻さんはもう１つの手で俺の性器を支えながら、ずぶずぶと挿入していく。
「だぁりん……」
イきすぎて真っ赤な顔をした霊幻さんと両手恋人繋ぎしながら、霊幻さんが腰をゆらめかせるのを特等席で楽しむ。
「ぁう……あ、あぁっ……イくぅ……っ♡」
メスイキした霊幻さんがふらりと倒れそうになる。
「危ないっ」
思わず超能力で支えそうになったのを、男優さんたちが両脇から支えた。
「ありがと……ござます……あの、もう、抜い」
ずん。
「〰〰〰っ！？！？！？」

男優さん達は、無情にもイったばっかりの霊幻さんを打ち下ろした。
「やだっ、ダメ……っ、ダメダメダメダメやだぁ……っ！！」
そのままズンズン無慈悲にピストンする。
髪を振り乱して喘ぐ霊幻さんは無視だ。
「あああ……っ♡」
白目を剥きかけた霊幻さんがダラダラと射精する。
ひくん、と身体を跳ねさせた霊幻さんの中に、俺もたまらず出した。
「んっ……♡」
ようやく持ち上げて抜いて貰えた霊幻さんのアナルから、ごぼっと一気に精液がこぼれて内またを流れていく。
それをじっくり映して、撮影は終了した。

「た、立てない、です……」
「だろうね。スタッフー、担架ー」
担架が運ばれてきて、霊幻さんは担架に乗せられて身体を拭かれる。
「好きなだけ仮眠していいから」
そのまま控え室に運ばれていく。
「芹沢ちゃんはシャワー浴びたら帰っていいよ」
「……いえ、霊幻さんに付き添ってます」
「あ、そう。じゃあ仕出し弁当食べちゃってよ。賞味期限ヤバいから」
「はい」
スタジオは片付けに入っていた。
俺はなんとなく名残惜しくなりながら、控え室に戻る。
そこでは布団をかけられた霊幻さんが、すやすやと眠っていた。
「……お疲れ様でした」
汗で張り付いた髪を指で寄せながら、そっと声をかける。
……俺は、優しい顔ができていただろうか？
……どこか、満足にわらう、肉食動物の気分だった。

※※※※※

「あのＡＶ、評判いいらしいですね」
相談所で２人きりになった瞬間に、たまらず口に出す。
「ＦＡＮＺＡでもランキングに入ってましたよ。霊幻さんもう見てみました？」
霊幻さんの、目が。
胡乱に俺を見て、嫌な予感がした。
「芹沢」
唇がゆっくりと動く。
「別れよう」
頭が真っ白になる。
なんでですか。嫌ですよ。そんなの、そんなの嫌だ。
納得いかない。納得しない。
一緒にＡＶまで撮っておいて、

逃　げ　ら　れ　る　と　思　う　ん　で　す　か　？

続